

勅使河原勝男君の逝去を悼む

田村 栄一郎

今から3年前の1989（平成元）年の4月に、この大学に再就職した時には、こんな文章を書かなければならないなどは、夢にも思っていなかった。

勅使河原君と私との、授業の面でのつきあいは、彼が1968（昭和43）年の4月に、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程の2回生に進級した時から始まる。この年に私も、同大学の大学院社会学講座の合・助教授として、初めて大学院の授業を兼担することになり、彼と橋本敏雄君（現在、明治学院大学社会学部教授）の2人を相手に、1年間、講義や演習を行った。彼等は、学芸大学大学院の1期生である。

それまで私は、2人とは、学部学生時代には接触が無かったものと思っていた。ところが、私が文教大学に就職してから、ある時、彼が「学生時代には、課外授業でお世話になりました。」とポーンとつぶやいたので、すっかり忘れていた、あることを思い出した。それは、彼等が学部4年生の時に、教育社会学の勉強をしたいと申し出たので、今は亡き馬場四郎氏（東京教育大学教育学部教授）のテキスト（誠文堂新光社、1962年）を使って、2人を相手に、課外ゼミめいたことを1年間やった、ということである。

さて、大学院の、今度は正規の授業で何をやろうかと相談したが、2人は、その数年前に刊行された、私の著書を読みたいといい出し、私はためらったが、是非と2人がいうので、しぶしぶ承知した。そうしたら、案の定、2人は、戦前・戦後の日本におけるナショナリズムと教育政策の関わりあい巡って、私の著書の不備なところ、痛いところを突いてきたので、私としては、多少とも、「しまった」と思わざるを得なかった。

その他、戦後のアメリカの対日占領政策（とくに教育）について、時には二対一で、時には三人三様に討論をしたことが、今となっては、なつかしくも又、悲しい思い出である。

彼が健在であつたら、どういう研究を進めたであろうか。ここ数年の「講義概要」を見ると、彼は「職場、労働」などに関心を抱いていたようである。しかし又、彼には「学歴社会と青年」「教育と中流意識」などの、すぐれた論文がある。もし健在であつたら、これらの領域を統合する（integrate）研究テーマを、コンピューターを駆使して開拓したであろう、と私には思われる。そう考えると、心が痛む。

もっと書きたいが、紙数の制約があって、ペンを置かざるを得ない。ふれ得なかった彼の人は、彼を知る凡ての人々の胸に永久に生き続けるであろう。

月並みな表現であるが、心からご冥福を祈る。